

---

# 幻夢抄録 覚醒め

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻夢抄録 覚醒め

### 【Nコード】

N1188A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

早瀬氷魚はやせこいし彼女は、どこにもいる、ごく普通の高校生。氷魚は、連日の悪夢に悩まされていて、夢の中の言葉「迎えに行くからね」が気になっていた。そして、その言葉が遂に現実！？氷魚は、「迎えにきた」と言っ、突然現れた瑪瑙めうと名乗る少年に連れられて、異空間への門を潜ってしまう。砂漠を越え、広野を渡り…。自分の生きる意味とは？なぜ生きているのか？生きるべき場所を目指して、二人の旅は続く。

## 白昼夢（前書き）

こんにちわ、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』 更新致しましたことをお知らせ致します。

氷魚の前に現れた瑪瑙という少年、彼は一体！？

まあ、ごゆるりとお楽しみくださいませ

## 白昼夢

闇、だった。

その闇の中、高く虚ろに、水音にもよく似た音が響く。  
彼女は、哀願していた。

（オネガイ、アタシヲヨバナイデ…アナタハ、ダレ？アタシヲヨバナイデ、メザメナンテ、ノゾンデナイノニ！）  
樹々を伝う、赤い雨。

『あれは、なあに？』

『迎えに、行くからね』

おかしな夢を見た。

凍えそうなくらいに寒く、真っ白で。

もしかしたら、雪だったのかもしれない。

凍える寒さの中で、あたしは、血にまみれて泣いていた。

『目覚めるのは、イヤだ』と。

それは、妙に生々しく、はつきりと明瞭に思いだすことができた。

（なん、だったんだろう？）

その、妙な夢の余韻が抜けず、ベッドに座ったまま、ぼーっと呆けていた彼女を、母親の怒号が殴った。

「ちよっと、なにボケツとしてるの！？学校、遅刻するわよっ」

「ああ、はい！いま下行くからっ！」

ベッドから立ち上がったその時、枕元に置いてあった、目覚まし時計が落下する。

アラームが、穏やかな朝の静寂を切り裂いた。

「あゝっもう、うるさいなあ…どうして今ごろ鳴るんだか」

制服に着替え、着替えの為に閉めてあった、うす藍色のカーテンを開ける。

雲一つなく晴れた空が、目に眩しかった。

「うーん、今日も快晴なり。いいことありそう」

アルミサッシの窓を開けると、初夏の朝風が舞いこみ、彼女の制服の、若草色のスカートを、ひとしきりに揺らした。

「今、夏：だよな？あの夢、なんだったんだろ？」

彼女は、ぽつりと呟いた。

ここ最近になつて、同じ夢を何度も見るようになった。

なにか、原因になりそうな物を、いくつか思い浮かべてみる。

思い浮かべてみるが：結局、いくらもしないうちに、彼女は考えるのをやめた。

面倒くさくなつたのだ。

「ま、いつか。それより朝ご飯たべよつと」

彼女はギシギシと、古びた階段を軋ませながら、暢気にも鼻歌を歌いながら下りていった。

「おつはよう」

台所の暖簾をくぐり、彼女は椅子に座った。

座ると同時に、コトリとテーブルが鳴り、目の前にトーストとベーコンエッグが出された。

「ほら、早く食べなさい。遅れるわよ？」

皿を置いた彼女から、機嫌の悪い、ピリピリとしたものが伝わってくる。

それは、別に自分に対して腹を立てているのではない。

朝の母は、機嫌が悪いのだ。

それが、今に始まつたことではないのが分かっているので、別段、気に留めたりはしない。

「分かつてるよお、いただきまーす」

言われた彼女は、とぼつちりは御免、とばかりに肩をすくめてから笑った。

「氷魚<sup>ひお</sup>あなた、最近顔色が悪いようだけど、ちゃんと寝てるの？」  
しかし彼女は、質問には答えず。

トーストを銜<sup>くわ</sup>えたまま、せわしなく廊下を右往左往していた。

「お母さんっ、そんなの話してるヒマないんだって！」

毎朝の光景に、彼女の母親は、先が思いやられる、と溜息をついた。  
「忘れ物は、お弁当持った？」

「ないないっ、いつてきまゝす！！」

玄関のドアが、勢いよく閉まる音を遠くに聞きながら、氷魚は走り出した。

氷魚は、元気だけが取り柄の、どこにでもいる、ごく普通の高校生だ。

いま彼女は、絶体絶命の2つの危機に瀕していた。

一つは、寝不足。

二つめは、皆勤賞喪失。

「んぎゃっ、ヤバイよーんっ」

氷魚は、三度目の予鈴を遠くに聞いて、言葉通りに飛びはねた。

校内に、予鈴が軽やかに木霊する。

氷魚は、息も絶え絶えに、机に突っ伏していた。

「せ、せえーふ」

「ひーちゃんてば、今日は自習って言うてたでしょー？聞いてた？」  
死にかけている氷魚を、後ろの席の、クラス一のトラブルメーカーで、小学校からの幼馴染みでもある小松千早ちばが、寄ってきてからかった。

「たぶん、寝てたわ…」と氷魚。

「うん、分かる…担任の授業って、眠くなるよねえ」

「なるなる」

氷魚達の、担任が担当しているのは国語だ。

老年の彼の授業は、テンポが遅い。

なので昼食後の授業は勿論、朝一でも、どうしても眠くなってしまったのだった。

「ヒマだよねえ、ふああ」

氷魚は、欠伸をかみ殺しきれずに、大あくびをしてしまった。

「なした、寝不足？」

彼女、千早が聞いた。

しゃがんで目線をあわせ、首を傾げている。

「そうなんだ、ここ最近、ヘンなの」

「ヘンで、悩みごと？親とか？」

「ううん、夢を見るの」

「夢、どんな？」

「言っても、笑わない？」

「笑わない笑わない」

「ホントかなあ」

「ホントだつて…話してよ、気になるじゃない」

「うん、なんかね…夢の中で、なぜかまわりが真っ白で、寒くて。

もしかしたら雪だったのかも知れないけど、あたし…いつも血まみれで泣いてるんだ？」

「ううん、血まみれかあ…疲れてるんだよ、きっと。休めばよくなるさ、元気だしなよっ」

「そ、そうだよな？サンキュー」

そう言つと、氷魚はもう一度欠伸をして、机に突っ伏してしまった。  
「こりゃ、相当ひどいね…可哀相だし、ほつとこつと」

初夏の、生温い風が、氷魚の髪をそつと撫でた。

くすぐったさに目を覚ました彼女は、二、三回瞬きする。

放課後の教室には、静寂が満ちていた。

「あれ、あたし…寝てた？もう、それにしても、起こしてくれれば  
いいのにさ。仕方ないなあ、一人で帰るか」

廊下を歩きながら、他の教室も覗いてみる。

しかし誰もいないのは、どこも同じだった。

（ホントに、誰もいない。おかしいなあ…そんなに、遅い時間でもないのにねえ）

氷魚は、靴箱を閉めると、外へ歩き出した。

（やっぱりヘンだ、なにかが可笑しい）

いつもは、学校帰りの学生で賑やかな商店街。

しかし今は、まるで死に絶えたかのように静まりかえっている。

氷魚は、大通りに出ると、携帯で自宅に電話をかけた。

無機質な呼び出し音が響く。

一回。

二回。

四回。

氷魚の背中を一筋、嫌な汗が伝った。

どうしたんだろうか。

なぜ、出ない？

もしかしたら、何かあったのか？

「どうしたんだろう…」

携帯を閉じる氷魚。

通り抜けていく風の音が、いやに、大きく聞こえた。

とりあえず、なにがあったのか確かめなければ。

氷魚は走り出した。

橋を渡り、砂利道を走り抜け…。

しかし、そこにあるはずの自宅はなく、茶色い土を剥き出しにした、

ただ広い敷地が広がっていた。

「うそ、なんで…なんでウチがないの！？一体、なにが」

背中に強い衝撃を感じて、氷魚は、きつく眉根をよせた。

「石…じゃなかった、なに、祠？なんでウチの敷地にこんなのがあるんだろ」

その時、どこからともなく、男の笑い声がする。

もう、可笑しくて、仕方がないと言ったふうの声だ。

「ねえ、誰かいるの？！」

氷魚は、せわしなく周囲を見まわす。

しかし、くつくつと笑い声は止まない。

「ねえってば！」



血が上って、怒鳴り散らした彼女に、やっと気づいたように男の聲が応えた。

「あ、ああ…すまない。気を悪くしないでくれ」

「どこにいるの!？」

きよろきよろ、と見まわす氷魚。

しかし、なかなかそれらしい姿は見つからない。

「すぐ側にいるぞ? 氷魚、お前の足元にね」

「え…黒猫、どこから…」

黒猫は、氷魚を見あげて一声鳴くと、笑い始めた。

「迎えにきたよ、氷魚。ああ可笑い、お前の、あの時の顔と来たら、腹がよじれるかと思った」

「ね、ね、猫が喋ったあ!？」

あり得ないものを見た人間がする、お決まりの行動。

氷魚は、後ずさった。

「およ、やつぱりこの姿はマズかったか…これが氣にくわんなら、何にでもなるぜ?」

猫は、祠に跳び上がると、黒いノースリーブに、ジーンズを着た男に変わっていた。

「あ、あんた、一体!？」

おそろおそろ、男の方に近づく氷魚。

「お前を迎えにきた、それはさっき言ったな?」

いきなりペースが崩れ氷魚は、ぱちくりと瞠目した。

「いや、そうじゃなくて」

「ああ、自己紹介してないのか。俺は、瑪瑙めのうっていう。よろしく勝手に話を進める彼に呆れつつも、氷魚は、とりあえず状況整理をすることにしたのだった。

「あ、あたしを迎えにつて、どういうこと?」

(なんなのよ、コイツ…いきなりペースがずれたし)

「なにも覚えてない、か。まあ、仕方ないよな、小さかったし」  
「え?」

氷魚は、内心頭を抱えた。

目の前にいるこの男は、初対面の筈の、あたしを知っているというのだ。

（ますます分かんないっ、なんなのよコイツはあ！？）

「えーっと、つまりだな…アンタは、人間として育ってきたが、それが全部嘘だつて事さ」

「は？なに、なに言ってるのか、さっぱりわけ分かんないんだけど？」

「だーから、お前は人じゃねえってことだよ」

「ばちん、とウインクを飛ばしてきた彼

瑪瑙に、氷魚は、

サーッと全身の血の気がひいた気がした。

## 瑪瑙（前書き）

突如、目の前に現れた少年・瑪瑙。氷魚は彼に『お前は人間じゃない』と言われてしまう。戸惑う氷魚は…

## 瑪瑙

「お前は人じゃねえ。俺と同じ、魔属だよ。まったく、魂<sup>こん</sup>だけで出てきて、そんなに急ぐ必要がどこにあったんだ？」

片眉を上げて、困った顔をしてみせる瑪瑙。

一方、氷魚はパニックのあまり、眩暈を起こしていた。

「だっ、だつて、どこ行っても、誰もいなくて、しかも、ウチはなくなつてっ」

「とにかくだ、今は、早く体に戻んな。夜、また迎えに行くからよ」  
氷魚は、今にも倒れてしまいそうだった。

あまりに早い展開に、頭がついていかないのだ。

「いや、まだ分かんないんだけど…ねえ、戻るって、どうやるの？」

氷魚はまた、背筋が寒くなる思いをした。

「強く念じればいい、やれやれ…じゃ、後でな」

「あ、ちよつと待っ…」

その時、彼が消えたのか、あたしが消えたのか、分からなかった。

「…お、氷魚！？ちよつと、あなたどうしたの！？しっかりしてちよつだいっ」

「ん…」

氷魚は、揺さぶられて目を開く。

ぐるりとまわりを見まわすと、自分は、自宅の玄関前に横たわっているようだった。

どうやら、無事体に戻れたらしい。

「さつき学校から電話があつて、あなた、無断で早退したつて言うじゃない。どうしたのっ？」

母の金切り声が、頭に響く。

氷魚は、ふるふると頭を振った。

「さつき？ね、お母さん、今何時？」

「いま？今は、12時半ちょっと過ぎだけど？」

「12時、半？うそ、どうなってんのっ、あたし、さっきで学校にいたのに…もうっ、一体なにがどうなってるの！？」

氷魚、苦惱中。

少し躊躇<sup>ためら</sup>いぎみに、彼女は氷魚に声をかける。

「なあに、へんな子ねえ。お昼、まだなんでしょ？作るから早く中に入りなさいよ」

「う、うん」

玄関に入っていく母の背中を見送ると、氷魚は、石膏<sup>せきせい</sup>の空を見あげて呟いた。

「あれも、夢だったのかな？」

風が、語尾をかき消す。

氷魚は、くるりと踵を返すと、玄関に消えていった。

## 旅立ちの時（1）（前書き）

再び、氷魚の前に現れた瑪瑙。 < b r > 『お前は、今夜死ぬ』と。  
< b r > 彼は急に、こんな事を氷魚に言った。 < b r > 彼女の運命、  
いかに！？

## 旅立ちの時（１）

「氷魚、お昼できたわよ？」

彼女は、居間に氷魚の姿がないのに気づき、廊下に出た。

一歩、階段に足をかけて、氷魚を呼ぶ。

しかし、返事は返ってこなかった。

「氷魚、氷魚……」

うす闇の中、中音の男の声が響く。

漂っていた彼女の意識は、ゆるゆると浮上を始めた。

「ん、誰……？あたしを呼ぶのは」

氷魚は、ごしごしと眠い目を擦り、顔をあげた。

「やーっと起きたかよ、俺だよ、俺！」

ぐるりと視界を巡らせると、瑪瑙が机に座っていた。

「あら、さっきの猫ちゃんじゃない」

「瑪瑙だっ、記憶力ないのか！」

欠伸をして、つつこむ瑪瑙をシカトする氷魚。

「で、なんなのよ。例の【お迎え】？」

「話を逸らすんじゃないねえ、それもあるが、教えてやりに来たんだよ」

シカトをされて面白くなかったのか、瑪瑙は、憮然として言った。

「何を？」

氷魚は、訝しげに眉をひそめた。

相変わらず、この男は言葉が足りない。

「お前：今夜死ぬぜ。だから、思い残しがあるなら、早いウチに済ませとけよ」

一瞬、思考が止まった。

心臓が、止まるかと思った。

急に、なにを言いだすのだこの男は！

「ち、ちよっと！死ぬってなに！？何なのよっ、って言うかアンタ、

ひとつ言もそんな話、しなかったじゃない！いきなり現れて、そんなこと言っんじゃないよっ」

氷魚は、瑪瑙の襟首を、ガクガクと引つ張りあげて怒鳴った。

「まつ、待て！ヒトの話は、最後までちゃんと聞けって…続きがあるんだよ」

締めあげられた瑪瑙が、じたばたと暴れる。

彼としても何とかして、この状況から抜け出さなければならぬからだった。

「え？」

氷魚は、動きを止める。

「ぶは…死ぬかと思っただぜえ」

瑪瑙は、襟元を直しながら、話し始めた。

「別に、生命自体が消えるわけじゃない、言い方が悪かったよな、ごめん…被っていた人の皮が破れて、孵化をする、これは覚醒めなんだ」

「覚醒め？」

きよとん、と首を傾げる氷魚。

「ああ。まだ時間もあるし、挨拶ぐらいしてこいよ。もう、会えなくなっちまうぞ？」

「あ…えなくなる？」

「そうだ、人として生きた記憶は、そのまま残る。相手も、お前を忘れない。だけどな、俺たち魔属っていうのは、人の目には見えななんだ。例え、目の前にいてもだ、姿も見えずに、声も届かない」

「そんな、どうして!？」

勢いよく振り仰ぐ氷魚に、彼は、どこか辛そうに微笑んだ。

「それが、決まりだからだ」

握りしめる氷魚の掌に、きつく爪が食い込む。

「ねえ、あと…時間、どれくらい？」

俯いたまま、氷魚はぽつりと呟いた。

「日没…陽が沈んですぐに、変化はくる。行くんだな？だったら母



親に言っておけ、暗くなったら、絶対外に出るな、と。いいな？」  
「分かった…」

ゆつくりと、木目地のドアが閉まる。

氷魚が部屋を出て行ってから、瑪瑙は悲しげに、一息をついたのだった。

「可哀相だが、仕方ないんだ…」

階段を下り、廊下を抜けて。

氷魚は居間に入った。

「ねえ、お母さん」

氷魚は、いそいそと、台所を片付けている母の背中に話しかけた。

「ああ、氷魚？お昼なら冷蔵庫の中よ？」

「うん、ありがと。ねえお母さん、あたしがいて、よかったって思ったこと、ある？」

「もう、どうしたの？あるに決まってるじゃない。ヘンな子ねえ…」  
彼女は、怪訝そうに眉を寄せた。

「ううん、なんでもない。ありがと、お母さん」

氷魚は、泣きそうになるのを、笑って誤魔化した。

「氷魚、あなた最近可笑しいわ？もしかして、どこか悪いの？」

母親は、心配そうに、氷魚を見あげていった。

「なんでもないの、ただ、聞いてみただけ」

「そう、ならいいけど…」

「お母さん、今日は、もう外には出ないでね？危険だから」

「氷魚？」

「絶対だよ？」

「え、ええ」

なぜか強く念をおす氷魚に、母親は、なにが何だか分からない、という顔をしながらも頷いた。

「元気でね、お母さん…バイバイ」

すれ違いざま。

氷魚は、そつと呟いた。

「ちよつ、ちよつと氷魚…なんなの？一体」

氷魚の、部屋のドアが閉まる。

「あ、氷魚」

戻ってきた氷魚に、話しかけようとした瑪瑙は、びくりと動きを止めた。

彼女は、泣いていた。

溢れる涙を拭いもせず、声を殺して、泣いていた。

「もう、全部渡した…あたしは、独りぼっちだ」

むせび泣く彼女を慰めるように、瑪瑙は、ポンポンと軽く背中を叩いてやった。

「陽が沈む。時間だ…氷魚」

「どうなるの？あたし」

開け放しの窓から入った風が、カーテンを大きく揺らす。

氷魚は風を纏<sup>まと</sup>い、青白く光り始めた。

「きれい…不思議ね」

風を纏いながら、流れるように、彼女の容姿は変化していく。  
黒く、艶やかな髪から、燃えるような、赤みを帯びた銀髪へと。

「氷魚、お前に、言っておかないとならん事があるんだ」

じつと、変化を見守っていた瑪瑙は、ひどく言いづらそうに、口を開いた。

「なんなの？」

ぱちり、と瞬いた彼女の瞳は、深い青色に変色していた。

「俺は、親友に、お前を捜して守るよう頼まれた…」

「親友、て…その人が、なぜあたしを捜しているの？その人は、今どこに？」

瑪瑙は、気取られぬよう、きつく唇を噛んだ。

云うことを、躊躇したのだ。

伝えるべきか、否か。

まだ目覚めたばかりの彼女に、【この事】を伝えるのは酷だ。分かってる。

けれど、伝えなければ、彼女を向こうに連れて行くことはできないのだ。

「ここに、こっちの世界にくる4日前に：死んだんだ。そいつは、氷魚、お前の兄だよ」

瑪瑙の予想どおり、氷魚は驚いた。

なにしろ、片割れの死を、告げられたのだから。

けれど、伝えたこっちも辛いのだ。

こんな事を思ってしまう自分が、なんとも憎たらしい。

暫くうち拉がれていた氷魚が、やっと、搾りだすように言った。

「あたしに、兄がいた？！死んだって言ったわね、なにがあったの？話して、お願い」

「いいのか？ホントに、聞きたいか」

初めて、距離を置くように言った瑪瑙に、氷魚は真っ直ぐな、澄んだ眼差しを向けた。

「いいの、話して」

彼女の目には、一点の曇りも、見受けられなかった。

真っ直ぐな瞳に促されて、瑪瑙は、その重い口を開いた。

「…あれは」

彼は、ぼつりぼつりと語り始めた。

4日前の、あの惨劇を

## 旅立ちの時（2）（前書き）

氷魚の前に突然現れた瑪瑙は、今は亡き親友・柘榴ざくろに頼まれて、氷魚を迎えにきたのだと話す。<br>二人の、危険（？）な旅が幕を開ける！<br>異界が舞台の、壮大スぺクタクル

## 旅立ちの時（2）

「…あれは、今から丁度4日前のことだった」

『向こう』の世界で、瑪瑙は、私用で村の外へ出るようになっていた。

「すまん、人手の足りないこんな時に出ることになっちまって…。母ちゃんが倒れたらしいんだよ、まったく仕方ねえたらねえぜ」崩れた家屋の残骸に腰掛けながら、瑪瑙は苦笑していた。ついこの間。

まだ一週間も経ってはいないだろう

他の、天敵魔属か

らの奇襲を受けたばかりで、村は悲惨な有様だった。

「行つてこいよ、そっちの方がよっぽど大事だ。村は平気さ、隣村にも人手を頼んでみるから」

そう言つて、一見、少女の様にも見える親友・柘榴しやくりゅうは、にっこりと笑つてみせた。

「柘榴…」

瑪瑙はうつむいた。

人手を頼むと言つても、どこの村も、今の状況が苦しいのは変わらないはずなのに。

自分は、無理な頼みをしているのだ。

「そんな顔しない…俺にとつても、お前の母さんは家族みたいなものなんだ。行つてこいよ」

「ホントにいいのか？じゃあ…」

彼の厚意をありがたく思った半面、後ろめたくも思いながら、瑪瑙は村を出ることにした。

たかが4日、そう思つて。

「悪いな、柘榴…4日で戻るから村の方、頑張れよ？」

「分かつてるさ、それと…瑪瑙、頼みがあるんだ」

瑪瑙は、首を傾げた。

柘榴が、自分も含めて、他に頼み事をするのは滅多にないからだ。いつも、自分も気づかぬうちに、手早く済ませてしまう。

「頼みって、随分珍しいじゃねえか、なんだよ？」

「ヒトを、探しているんだ…手伝ってくれないか？」

「ヒトねえ…好きな女でもできたのかよ？」

彼に想われる女性とは、一体どんな女性なのか、と瑪瑙は内心毒づきながらも、親友の、珍しい頼みを聞いてやることにした。

しかし、それがどうやら顔に出ていたようで、柘榴は、苦い笑いを浮かべていた。

「おいおい、眉間にシワ寄ってる、シワ」

「あ、悪い…」

「そんなんじゃないよ、大切な女性には、変わらないけどね」

「ふーん…で、その手がかりとかはあるのか？」

面白くなさそうに、口を尖らせる彼に、柘榴はくすくすと笑った。

「そうだった、手がかりと言っても、こんな物しかなくて」

瑪瑙の視界いっぱい、朱金色の金属でできた、ペンダントが飛び込んできた。

ペンダントを受け取った瑪瑙は、球形のそれが、真ん中から二つに開くようになってるのに気づく。

「お、なんか入ってる…髪、みてえだが？」

二つに開いたペンダントの中には、持ち主と同じ、鮮やかな赤毛が入っていた。

「うん、その髪が発する気を辿ってくれ。その先に、きっと彼女はいる」

「ああ、どんな女だろうが…この俺が絶対、連れて帰ってみせる。期待してるよ？」

ペンダントの中身

鮮やかな赤毛をポケットに押し込ん

で、瑪瑙は手を振った。

「済まないな、気をつけて行ってきてくれ」

「おうっ」

瑪瑙は、鷹揚に微笑む柘榴に見送られて、意気揚々と村を出て行った。

しかし、それが

元気な柘榴を見た最後だった。

彼が村を出た翌日、辺境の小さな村が、炎を上げた。

それから丁度、4日が過ぎた。

私用は済ませたが、なぜか 柘榴の妹 の情報は見つからず、手持ちぶさたで村に戻った瑪瑙は、変わり果てた村の光景に、ただ、茫然と立ち尽くすしかできなかった。

折りかさなる、焦げた死体の山。

崩され、焼き払われた家屋。

依然として燃えさかる業火が、白い灰をまき散らしている。爆<sup>は</sup>せて、目の前に倒れてきた材木を、瑪瑙は慌てて除けた。やはり、自分は村を出てはいけなかったのだ。

分かっていたクセに、なんて愚かなことを…！

瑪瑙は、ゆっくりと走り出した。

自分は、柘榴を探さなければいけない！

硝煙の中を、半狂乱で走りまわっていた瑪瑙は、障害物につまずき、地面に背中を、いやと言うほどに強打してむせ込んだ。

「げほっ！、げほ…ついてえ」

硝煙が、うつすらと晴れていく。

瑪瑙は、全身の血液が、凍った気がした。

そこに倒れていたのは、背中に死傷を負った少年。

傷ついてもなお整った、見なれた顔。

柘榴だった。

「柘榴！？おい、しっかりしろ、なにがあつたっ」

そつと柘榴を抱え起こした瑪瑙は、ぴくりともしなかつた親友が、薄く目を開けたので、少なからず安堵した。

あるいは、まだ助かるかも知れない、と。

「よかった…戻ってきて、くれたんだね…。も…う、会…えないか

と。君を、待っていた…」

言々と柘榴は、必死に、震える腕を伸ばしてきた。

その手には、あの、球形のペンダントが握られている。

「め、のう…これをつ、奴らは、ずっと狙っていた！」

叫ぶように言つて、柘榴は、むせ込むと同時に血を吐いた。

「やめろつ、これ以上喋ったら、傷が広がっちゃうつ」

「それでも、いい…言わせてくれ、頼む、頼む…っ！」

異様なほどに、目をぎらつかせる彼に強く腕を握られて、瑪瑙は折れるしかなかった。

「ざ、柘榴…」

「俺が、探してたのは…妹なんだ。まだ…幼かったあいつを、俺が、下界に落とした。殺されるよりは、と思つて」

「なにっ!？」

瑪瑙は、耳を疑つた。

下界           そこは、殺伐とした砂漠の向こう、地の果てにある世界だからだ。

「人間の…世界にいる。追わ…れることになる。あいつは、なにも知らない。守つて、やってくれ…俺の代わりに、頼む、お前しか、望みは…」

「分かった、分かったからもう、なにも言つなっ」

きつく抱き締める瑪瑙の頬に、柘榴の手が、そつと触れてきて撫でた。

「す、まない…迷惑、かけ…て」

「なに言ってるんだよ、バカ野郎が！しっかりしろってんだっ」

「そ…う、だね」

叱咤する瑪瑙に、柘榴はうつすらと笑顔を作つた。

「一緒に、探しに行くんだろ？そうだろ、柘榴」

彼が、また笑つたような気がして、瑪瑙は強く、柘榴を揺さぶつた。

「おい？俺…やっぱ一人じゃ無理だ、起きろよ、柘榴、起きてくれ、なあ？」



揺さぶるが、彼は頼りなく、たわむだけ。

柘榴は微笑んだまま、一人、大気に還っていった。

「分かった…その約束、必ず守るから。だから、そこで見ていくれ、柘榴」

「氷魚、氷魚？おい、ちゃんと聞いてたのか？」

話し終えた瑪瑙は、俯いたままの氷魚を覗きこんで、面食らった。

「うおっ！？なっ、泣いてる！」

数歩、後じさる瑪瑙。

彼は、何より苦手なのは女の涙である（別に、たらしではないのだが…）。

「だって、だってさ！泣くしかできないじゃないのっ」

さらに泣きじゃくる氷魚に、瑪瑙は頭を抱える。

「あーもう、と、とりあえず落ちつけ、な？」

「ねえ、瑪瑙、アンタなの？」

氷魚は、涙の溜まった瞳を、何度もしばたかせた。

どうやら瑪瑙も、慌ただしい彼女の仕種にすぐ、状況を察したようで、諦めたように、深い溜息をついた。

「あ　戻っちまったのか。元の姿って、キライなんだよなあ」

わずかに口を尖らせて、ぶつくさ言う彼に、氷魚は、きょとんと首を傾げた。

「なんで？別に、なんともないよ？不細工ってわけでもないし」

「でもないけど、俺はやゝなの！」

「あっそ…で、なに？話さなきゃいけない事って」

氷魚は、コンプレックスがどうの、といっている彼を無視して、やっとな本題を引っ張り出すことに成功した。

「立ち直り早いな、お前…まあいい、よく聞け。俺たちは狙われている、危険な旅になるって事だ、以上」

「は！？旅ってなにさっ、どこ行くのよ！」

「行くつて、決まってんだろ？俺たちの故郷だよ。全部死んだつ、  
て訳じゃないからな」

ばちん、と無邪気にウインクをした彼に、氷魚は、全身の血が引く  
思いをした。

「はあ？嘘でしょ……」

かくして、二人の危険（？）な旅が、幕を開けたのだった。

## 旅立ちの時（2）（後書き）

こんにちわ、維月です。『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。拙い話ながら、ここまで読んでくださる読者様、ありがとうございます。<br>次回、またも氷魚は騒動の渦中へ…。<br>お楽しみに！

## 異界の風（前書き）

瑪瑙に連れられて潜った、異界の入り口・水の門。 < b r >水の門の向こうには 炎天下の熱に灼ける、どこまでも果てない、広大な砂漠が広がっていた！？ < b r >異界が舞台の、壮大スペクタクル！

## 異界の風

「ねえ、ちよつと！聞いてる？どこ行くのよっ」

氷魚と瑪瑙は、氷魚の部屋を出て、砂利道を歩いていた。辺りはもう、既に暗い。

「どこって、今説明したろ？よし、ここらでいいか」

瑪瑙は、橋の側に立つと、小声でなにかを唱え始めた。ぴちゃん、と水が爆<sup>は</sup>ぜる音がうつろに響く。

川は、月の光を受け、白銀の花びらを散らし、ほの青く輝きながら、水面に門を浮かび上がらせた。

門、といつても、決して石造りの物ではない。

水そのものが、門の形を取っているのだ。

「うつわあ…なに、これ？」

氷魚は、目を剥いた。

橋の上から身を乗り出して、川面をのぞく。

「出口を開いた、水を媒介にしてな。こいよ、氷魚」

そう言ってから、なんと瑪瑙は、橋から飛び降りたのだ。

氷魚は、慌てて橋の下をのぞいた。

この橋は高く、川も大きくて深い。

しかし、水にぶつかる衝撃音がないところを見ると、平気のようだった。

「やだっ！怖いしつ、この橋って、高いのよお…」

氷魚は、後じさる。

ダメなのだ、高い場所が…！

ぎゅっ、と目を閉じて、欄干にしがみつく氷魚の傍で、瑪瑙の呆れたような、深い溜息がした。

「やれやれ、しょうがねーなあ」

瑪瑙は、一蹴りで橋の上にいる氷魚の傍に着地すると、やにわに氷魚を抱き上げた。

「んなっ！ちよつと、離しなさいよっ…バカ、変態っ」

急に抱き上げられ、頭に血が上った氷魚は、瑪瑙の腕の中で、じたばたと暴れる。

「ったく、ちつとは落ちつけ…早くしねえと門が閉じちまうだろうが！」

なぜか、真剣な紫陽花色の瞳に見つめられて、氷魚は決まり悪そうに、ぷいつ、と視線を逸らした。

「も いやっ！」

「はいはい、通るぞ」

まだ僅かに暴れる氷魚を抱き込んで、瑪瑙は、再び橋から跳んだ。高く、虚ろな水音が響いて、止まっていた時間に色彩が戻る。

しかし。

そこにはもう、水の門も、二人の姿もなくなっていた。

「ん、う…？」

温かい。

心臓の音が、心地よい…。

誰の、だっただろうか？

長時間を揺られて、うとうとしていた氷魚は、頬に温もりを感じて目を覚ました。

「お、目え覚めたか。いま丁度、着いたところだ」

氷魚は、目を見張った。

「なっ、な、なによここは !？」

砂漠、だった。

二人の前には、どこまでも、広大な砂漠が広がっていた。

「見りゃ分かんたろ？砂漠だよ、さ・ば・く」

瑪瑙は、抱いていた氷魚を、砂の上に降ろす。

「まさか…いまから砂漠渡るなんて、言わないよねえ？」

皮肉たつぷりに言っただけだったが、瑪瑙は真顔で、「そうだ」と返してきた。

「ああ、もう…殴ってやりたい」

氷魚は、がつくりと頂<sup>うなだ</sup>垂れた。

目の前に広がるのは、炎天下の熱に灼けた、広大な砂漠だ。

（なんの準備もなくて、こんなところ、進めるわけないじゃない！）

内心、氷魚はひどく毒づいた。

確かに、氷魚の服装は、およそ砂漠に向いたものではなかった。

タンクトップに、膝丈より短いスカート、そして、履き古したスニーカー。

「ほれ、これ被ってな…日よけだ」

キンキン、とうるさい氷魚の頭に、白い布がかぶせられる。

瑪瑙は、自分の被っていた、少しうす茶けた外套<sup>マント</sup>を投げてよこしたのだった。

「…あ、ありがとう」

「いいよ、別に。平気なら行くぞ？」

小さく返事をした彼女に、素っ気なく言うと、瑪瑙は背中を向けた。

「ねえ、そういう瑪瑙は…なにも被ってなくても平気なの？」

ちよこちよこ小走りに走って、瑪瑙の隣に並んだ氷魚は、遠慮がちに問いかけてみる。

「あ？俺はいいんだよ、慣れてる」

「そ、そうなんだ…ホントに？」

（な、なんか…さっきと雰囲気ちがわない？）

「ああ…」

しばらく、両者の間に、音のない時間が流れた。

それを始めに破ったのは氷魚だった。

「ねえ、これから行く所って、ここからどのくらいなの？近い？」

「近い、ことになるかな。3ヶ月くらいで着くぞ」

「もう驚かないわよ…そう、3ヶ月ね。それで…その間ってやつぱり」

「野宿になるな」

きつぱりと言った彼に、氷魚はまた頂垂れる。

「食べ物とか、どうするの？」

「まあ、なんとかするさ…心配いらねえよ」

「なにそれえ…」

砂漠の、寒暖の温度差は激しく、夜の冷え込みは厳しい。

夜。

二人は、焚き火の傍で野営していた。

「さつ、寒い…冬みたい、ううん、それよか寒い」

何度もなくしゃみをして、縮まる氷魚の頭を、瑪瑙は撫でてやる。

「冬は、これよりもっと厳しいぜ？一定の、動植物しか生きられなくなるんだ」

「一定の動物って、それ以外がいるの？」

「ああ、家畜とかだ、それ以外は、たぶん死ぬか冬眠するな」

「ふうん。ふああ…」

氷魚は、欠伸をかみ殺す。

「眠いか？」

「うん…」

目を擦る氷魚の横顔に、なぜかドキッ、とした瑪瑙は、ポリポリと頬を掻き、慌てて顔を逸らした。

今の自分は、多分、とんでもなく真っ赤になっているだろうから。

「氷魚、その…なんだ、悪かったな、急展開ばかりで。疲れたよな？だから…少し、休め」

「うん、じゃあ…少し寝るね？」

氷魚は、炉端に伏せると、ほぼ同じに眠っていた。

「もう寝てらあ…疲れたよな、ごめんな」

囁くように呟いて、瑪瑙はずっと、安らかに眠る、氷魚を見ていた。



## 追っ手（前書き）

どうも、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。

一緒に旅をするうち、ほのかに惹かれ合う氷魚と瑪瑙。  
うーむ、この恋…実るか？

## 追っ手

夜明け前、まだ空も白まないうち。

二人は、早々に夜営地を去った。

砂漠の寒暖の差                      特に、深夜から夜明け頃の冷えこみは厳しい。

冷えこみは厳しいが、夜明けの移動は、日中に砂漠を渡るよりはいくらかマシで、より広範囲に渡つての移動が可能なのだ。

「瑪瑙：待つて、きゃ！」

なにもない砂地                      だと思っていたが、氷魚はなにかに躓いた。  
つまず

「なんだよ、その格好」

ぱふんと、砂埃を舞わせて転んだ氷魚を、瑪瑙は笑う。

「躓いたのよ：見れば分かるじゃない、やなヒトねっ」

決まり悪そうにして、氷魚はぷいっと明後日の方向を向いてしまった。

「ああ、ごめんって：ほら、手え貸せ」

瑪瑙は、まだくつくつと笑いながら、氷魚に手を差し出した。

「ありがと：もう、砂だらけ」

文句を言いながら、砂を払い落とす氷魚。

そんな彼女を、瑪瑙は目を細めて見つめていた。

氷魚はそれに気づいたふうもなく、依然、砂がどうと文句を言っている。

砂漠を渡つて                      もうすでに2ヶ月半が過ぎていた。

「ねえ瑪瑙、なんだったんだろ？」

氷魚は、躓いた場所をもう一度振り返ってみるが、やっぱりなにも見当たらない。

「躓いただけだろ？ホレ行くぞ」

「うつ：うつん」

（なーんか、おかしい：釈然としないなあ）

氷魚が、瑪瑙を追って背中を向けたそのあと、すぐに、彼女からそう離れていない砂地が沸くように盛り上がり、鋭利な爪を持つなにかが突き出される。

それは丁度、蜘蛛のような、節足動物の脚に、ひどく似ていた。

突き出された脚は、周囲の砂を大きく掻くと、再び砂の中へと沈み、それが通った後には、巨大な穴だけが残された。

追跡者は、氷魚に狙いを定めたのだ。

地中深くに潜り、力を蓄えながら、獲物が弱る瞬間を待っている。

（いる… やっぱり、なにかがいる！？これは、危険だっ）

氷魚の中で、警鐘が鳴る。

耳の奥で、血汐が逆流する音を、氷魚は聞いた気がした。

「…お、氷魚、どうしたっ？」

「あつ、な…なに？」

振りむくと、怪訝な顔をした瑪瑙が、不機嫌そうに腰に手を当てて立っていた。

どうやら、話しかけられていたのに、気づかなかっただけらしい。

「なした…青い顔して、少し休むか？」

瑪瑙が、自分を心配してくれた。

そう思うと、なぜか頬が熱くなる氷魚だったが、今はそれどころではない。

「うつん、平気だよ…先を急ごう」

「ふーん、珍しいなあ…お前が急ごうだなんて」

ニヤニヤと笑う瑪瑙に、笑いかえすのがやっただ。

顔が、強張る。

多分、今すごく変な顔をしたと思う。

「そう？たまにはね」

「そっか」

叫びそうになるのを必死で飲み込んで、氷魚は笑った。

底知れぬ殺意に、氷魚はただ、青ざめることしかできなかった。

すでに陽は高く、砂丘の向こうには、ユラユラと陽炎が立ち上っている。

汗を拭うことも忘れ、氷魚は、ひたすら足を進めた。

「お前！やつぱり具合悪いんだろ？なんで、なに言わねえんだっ」  
ついに見かねた瑪瑙が、氷魚の腕を強く引き寄せて怒鳴った。

「平気、平気だったら…早く行こうっ」

じたばたと、振りほどこうとする氷魚の腕を、瑪瑙はさらに強く握りしめる。

「んな青い顔して！なにが平気なんだよ、どうしたんだ？」

瑪瑙は、荒げていた声なるべく和らげて、心底心配げな瞳で氷魚を覗きこんだ。

「瑪瑙…あたし、なんかに狙われてるみたい、止まっちゃダメなの、掴まっちゃうよぉ！」

「なんだって！？誰にだよっ」

瑪瑙にとって、氷魚に悪意を持って近づく者は、敵と同義にみなされるのだ。

「分かんないよ、でも分かるの！」

瑪瑙は、ガタガタと打ち震える氷魚を、優しく抱き締めてやる。

「大丈夫だ、俺がいる…暑さで幻覚でも見たんだよ」

とにかく、少し休もうと言いかけた瑪瑙は、とんでもない異変に気がついた。

氷魚の、足元の砂が不自然に盛り上がり、様子を伺うように、尖った爪を持つ脚が蠢いていたのだ。

「やつ、なに！？」

しがみついていた氷魚が、さらにきつく瑪瑙の胸板にしがみつく。

「いい子だ、氷魚…このまま俺の傍から離れんな？」

「瑪瑙う」

「俺としたことが、油断したな…伏兵か！」

氷魚は、戦<sup>おの</sup>いた。

耳の奥で、鼓動がうるさい。

その音は、逆巻く潮騒の音と、ひどく似ていた。砂が流れ始めてすぐ、それは姿を現す。

ギチギチと、耳障りな金属音と共に現れたのは、巨大な蟻地獄だった。

氷魚は、ヒツと喉の奥を鳴らして、一步後じさる。

「なあに、大した奴じゃねえよ…心配するな」

なにを考えているのだ、この男は！？

こんな巨大で、気味の悪い相手に、勝つ気満々である。

「無理ッ！無理よつ、あんなにでつかいんだもの、一人じゃ…どつ、どうしようっ」

妙に、自信ありげな瑪瑙の腕に、氷魚はきつく抱きついた。

「心配ねえ、信じる！」

その先を言おうとした氷魚を、瑪瑙はきっぱりと遮った。

瑪瑙はいつの間にか、腰の長剣を抜きはなっていた。

氷魚は、それにひどく面食らう。

（刀！？瑪瑙、そんなもの持ってたなんて…全然気づかなかったっ）

「お前っ、『二連』（にれん）を知らないわけねえよなあ？」

そう言つて、瑪瑙は獲物に鋭く切っ先を向ける。

二連、という名を聞いて動きを止めた敵に、瑪瑙は心底おもしろそうにニヤリとした。

（二連つて、なんだろ？そうじゃなくてっ、もしかしてあの化け物、瑪瑙を怖がつてるの！？）

氷魚は震えながらも、対峙する瑪瑙と蟻地獄を、穴が開くほどに見つめる。

「正確にや、もう二連じゃねえけどなっ、俺に出会ったのが、運の尽きだっ」

刀を振りかぶった瑪瑙に、蟻地獄は勢いよく後退して砂に潜り、完全に姿を隠してしまう。

どうやら、形勢不利を悟ったようだ。

「ち…っ、潜りやがった！」

瑪瑙はきよろきよろと、あたりを注意深く見まわしながら毒づいた。

「瑪瑙！あいつは…っ」

「来るな！」

びくつと、その場で氷魚が立ち止まる。

走りだそうとした氷魚を、瑪瑙は止めた。

「あっ」

「怒鳴ってスマン、まだ動くんじゃない？ 両方の触角を切ったが、油断は禁物だ」

「こ、こあい（怖い）…」

氷魚は、傍に寄ってきた瑪瑙に抱きつく。

きよろきよろと、警戒しながら見まわしていた氷魚の足を、砂の中から伸ばされた脚が掴み、硬く砂地に縫いつけた。

「やだっ、やだ、足がっ！」

その時、瑪瑙は不謹慎にも、胸板に押しつけられている氷魚の豊満な二つの膨らみに、意識を集中していた。

「ったく、諦めの悪い！出てこいっ」

瑪瑙は、氷魚からそう離れていない砂地に、刀を突き立てる。

氷魚の足を掴んでいた爪は、短い悲鳴と共に、勢いよく足を放して砂の中に引っ込んだ。

ぼこぼここと、砂底で蠢く感じが、足の下にも伝わってくる。

「瑪瑙、来るわ！」

「翔ぶ！しっかり掴まれ、放すなよ？」

「うん！」

瑪瑙が刀を引き抜いて、跳び上がると同時に、砂地が爆発して、苦しみ悶える蟻地獄が姿をさらした。

未練がましく、脚は砂を掻いていたが、それはすぐに動かなくなつた。

「あの…ごめんね？ 瑪瑙」

サクサクと、早足で先に行く瑪瑙の背中に、氷魚は申し訳なさそうに謝った。

「なにがだ？」

ふり返らずに、瑪瑙が尋ねてくる。

「だって、その…嘘、ついたから。迷惑もかけちゃって」

「んなわけあるか…」

「え？」

そっけなくぼそりと言った瑪瑙に、首を傾げる氷魚。

「だーから…別に、謝んなくていいんだよ」

「ありがと、瑪瑙」

「…おうよ」

瑪瑙の腕に思いきり抱きついて、氷魚は嬉しさに顔を赤らめた。照れ屋な瑪瑙は、たとえ嬉しくても、表情を変えない。

いや、変えないと思っているのは、彼だけかも知れない。

げんに、瑪瑙の顔も、氷魚に負けなくらいに真っ赤だった。

二人の旅は、まだ始まったばかり。

今日も、故郷を目指して旅は続く。

## 追っ手（後書き）

どうも、維月です。

ここまで読んでくださった読者さま方、ごくろうさまです。氷魚と瑪瑙の行く先、どんどん困難が立ちはだかります。

こんな話でよろしければ、どうか読んでやってください。



## 恋（前書き）

どこにでもいる、ごく普通の高校生だった氷魚は、ある日『迎えにきた』と言って目の前に現れた少年・瑪瑙と一緒に、異界への門を潜ってしまう。

瑪瑙の故郷を目指して、旅をする二人。

なにやら、親密な関係になりつつあって…？

異界を舞台に繰り広げられる、ラブファンタジー

## 恋

始めは固く、とげとげしかった氷魚も、今ではすっかり瑪瑙とうち解け気安くなっていた。

瑪瑙も、（いや、かなり）氷魚に興味を持っていた。

「くしゅんっ!？」

ぴん、と張った夜の静寂を、氷魚のくしゃみが破った。

「ん、カゼか？」

勢いをつけて干し肉を噛み切ってから、瑪瑙が聞く。

「うゝん、そうかしんない」

「熱、ないか？平気か？」

じつと見つめてくる瑪瑙に、氷魚はポツと顔を赤らめた。

瑪瑙が、心配してくれている！

そう思うと、頬が熱くなるのだ。

「うん、熱は…ないかな」

額に手を宛ててみて、照れ隠しに氷魚は笑って見せた。

「俺のやつ、貸してやるよ…そうすれば、少しは暖まる」

瑪瑙は、自分が着ている外套マントを脱いで、そつと氷魚の肩に掛けてやる。

「わあ、ぬくい…ありがと、あつ、でもアンタが寒くなっちゃう！」

慌てて、外套を返してきた氷魚に、瑪瑙は柔らかに笑った。

「なんの、平気だ…これくらい」

「ホント？ホントに平気？」

しゅんと、心なしか頂垂れた氷魚の頭を、瑪瑙はクシャクシャとかき混ぜてやる。

「ああ」

二人の間に、しばしの静寂が流れた。

「…氷魚」

始めに、静寂を破ったのは瑪瑙だった。

「なあに？」

うとうととしていた氷魚は、ふにや？と眠そうな顔を瑪瑙に向ける。

「お、俺さ…あのな、あの…あああくそっ！うまく言えねえよっ」

いきなり、うわーっと頭を抱えた瑪瑙を、氷魚は慌てて覗きこんだ。

「ちょ、ちよっと…瑪瑙？あんたこそ熱あるんじゃないっ、顔真っ赤よ？」

「…いや、大丈夫だ」

ふらりと半歩、氷魚から離れる瑪瑙。

「ちつとも、平気って顔してないじゃない」

やっぱり風邪ひいたんだわ、と外套を持って近づいた氷魚を、瑪瑙はきつく抱き締めた。

突然のことに、氷魚は、瑪瑙の腕の中で身を固くする。

「瑪…瑙？」

「こうすれば…もっと温かい」

瑪瑙と、氷魚の二つの鼓動が、次第に同調し、溶け合っていく。

顔から火が出るとは、まさにこの事だ。

顔が、こんなにも熱いのは、なぜだろうか？

「違う、違うんだ…そんなことが言いたいんじゃないやねえ、俺、氷魚が好きだよ」

「め、瑪瑙…」

視線が、想いが絡まる。

氷魚はふと、異界 人間界で生活していた時を思い出した。

（そう言えば…向こうにいた頃、こないいいムードになったこと…なかったんだよね）

「お前さえよければ…夜明けまで、このままでいてやる」

うつとりと目を細めた氷魚に、瑪瑙は優しく囁いた。

「うん…ねえ、瑪瑙？あたしの兄さんって、どんなヒトだったの？」  
見あげる氷魚の青い瞳は、好奇心の目。

「そうだな… お人好しで、まじめで、俺と違って… 器量よしかな」  
二人は抱き合ったまま、いつの間にか白い砂の上に座っていた。

「前にも言っただけど、アンタも… 充分男前だよ？」

戸惑いがちに言った氷魚の顔は、うつすらと赤い。

「そう… なのか？」

「まーねえ… あたしの周りに、瑠璃みたいなヒト… いなかったし」  
そう言っつて、氷魚はゆっくりと目を閉じた。

「どうした、眠いのか？」

瑠璃は、抱き締めていた腕を緩めて聞く。

「うつん… このままでいて？ 温かくて、すごく落ちつく。心臓の音が、一つになつたみたいで」

幸せそうに、氷魚が頬を寄せた瞬間。

その時、うす水色の地平に、一条の光が走る。

夜明けだ。

また、一日が始まるのだ。

砂漠越えの、厳しい旅が。

「さあて、そろそろ動きだすか」

瑠璃は、氷魚を抱いていた腕を放すと、グツと縦に伸びをした。

「あ、瑠璃… これ、返すね？ ありがと」

氷魚が、外套を差し出した瞬間…

「な… にっ」

砂の上に、ぱさりと外套が落ちる。

氷魚は引き寄せられると同時に、唇に、温かな感触を感じて、目を見開いた。

瑠璃の顔が、すぐ目の前にある、唇を奪われたのだ。

「なっ… 瑠璃？ ちょっと、苦しいってば！」

予想はしていたが、突然のことに、氷魚は目を白黒させる。

「… りたい、氷魚、お前を守りたい！」

『守ってやる』ではなく、『守りたい』

見つめ返した瑠璃の顔は、もう赤くなかった。

「なんか、恥ずかしいけど…嬉しい」

「氷魚、もう一回していか？」

「やつ、やだ、なに言いだすのよ！」

再び、強く抱き締められて慌てた氷魚は、腕の中でじたばたと暴れる。

「いてっ！いてっ、ま、いいか…一回できたしvv」

「もうっ、調子乗るんじゃないっ」

ぴよんぴよんと、逃げまわる瑪瑙を追いかけて、氷魚は叫んだ。

「氷魚」

「なによっ、まだ何かする気？」

しゃーっと、構えた氷魚に、瑪瑙は苦笑せざるをえない。

完全に誤解されてしまったようだ。

「違うって、あれ！見てみるよ」

瑪瑙は、現在地から、そう遠くない地面を指さしていた。

「あ…そこっ、色が違ってる！砂漠が切れてるんだっ」

「行くぞ、氷魚！」

「うんっ」

二人は軽快に走り出す。

砂漠の暑さもどこへやら。

砂漠を抜けて踏んだ地面は、苔と、丈の短い下草が生い茂っていた。

「こりゃ…防風林みてえだな」

「わ、足元がふかふかしてる」

進むにつれ、細かった道は太く、整備されたものになっっていく。

「あ、車輪の跡！」

氷魚は屈んで、轍の土の欠片をつまみあげた。

「衙だ、行こう氷魚…ここがどこだか、確かめねえと」

「…あっ、待ってよ瑪瑙ってば」

ぼうつとしていた氷魚は、慌てて瑪瑙の背中についていった。

## 恋（後書き）

こんにちは、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。

やっと砂漠越えを終えた二人ですが…お疲れ様でした。（笑）

現実世界も、かなり気温が高く、室温が29 近くあります。

お暑期中、読んでくださった読者様に感謝です。

どなた様も、お体に気をつけて、つつがなくお過ごしください  
よう、読者様、並びに作家様方に、暑中見舞い申し上げます。

それでは、失礼致します。

## 氷魚、迷子！？（前書き）

無事に、砂漠を越えた瑪瑙と氷魚。

2人はその先の衙・呂山でしばしの休憩を取った。

しかし、瑪瑙が目を離れた隙に、氷魚が迷子になってしまう！

痴漢に遭っていたらしい氷魚を、裏路地で見つけた瑪瑙は、激しい嫉妬に駆られる。

## 氷魚、迷子！？

「ねっ、ねえ…この街<sup>まち</sup>から、瑪瑙の村までつてどれくらいなの？」  
氷魚は、とことこと足早に、瑪瑙の背中を追いながら話しかけた。  
背の高い瑪瑙と、小柄な氷魚の歩幅には、やはり誤差がでる。

つまり簡単に言えば、単に瑪瑙の歩くペースが速いだけなのだ。

（瑪瑙、待つてつてば…歩くの、早いわよっ）

氷魚の哀願がやつと通じたのか、瑪瑙は、ゼーゼーと荒く喘ぐ氷魚を振りむいた。

「そうだな…この呂山<sup>ろさん</sup>から、歩いて1日くらいか」

「…呂山、変わった名前ねえ」

少し落ちついた氷魚は、きよろきよろと、興味深そうに周りを見ながら言った。

いま2人は、街の大通りの脇に立っている。

街は、どちらかというと中華風で、いつか、テレビで見た中国の市場を思わせた。

「すごいね、色んな店が出てる…なんかお祭りみたいね？」

きゃっきやと嬉しそうな氷魚に、瑪瑙は、ひょいと片眉を上げる。

「じゃあ、少し見ていくか？」

「ほんと！？」

「ばあっ！と華やいだ氷魚に、こほんと咳払いをしてから、瑪瑙はさ  
らに付け加えた。

「いつまでも…その格好じゃ過ごしにくいだろ？夜は特に」  
言ってから、瑪瑙は照れ隠しに、ぷいっと背を向ける。

（へえ…ちゃんと、細かいところまで見てるんだなあ）

そんな瑪瑙を、氷魚は嬉しそうに、はにかみながら見つめていた。

「ここんトコ、ずっと敵しかったからな。息抜き…だ」

全部言い終えたとき、隣にいたはずの氷魚が…どこかに消えていた！



「なっ、氷魚！？あいつにしたら、なんか大人しいと思ったんだよっ」

（じゃあ、さつさと気づけよ…）

ぬあゝっと、ひとしきり頭を抱えてから、瑪瑙は人混みの中を縫うように進み、走り出す。

その頃氷魚は…人の波に流されるがままに進まされて、やっとの事で、その流れから脱出したところだった。

うざったい、人混みを抜けたのまではいい。  
独りぼっちだ…。

「マズイ、よね？これ、絶対迷子…だ」

そのとおりだった。

相変わらず、人通りは激しい。

氷魚はその中に目を走らせて、おろおろと瑪瑙を探す、見つからない。

どうしよう…どうしよう。

瑪瑙、怒ってるだろうな、それはもう鬼のように…。

怒っている瑪瑙を思い浮かべて、氷魚はサーツと青くなる。

『迷子の時は、動かないのが一番』と俗に言うが、氷魚にはそれが、今の自分の為になるような、大した意味を持っているとは思えなかった。

短絡に考えた末に、氷魚は再び人混みの中に紛れていった。

（動いていれば、瑪瑙と会えるかも知れない！）

同時、瑪瑙も、氷魚を探しまわっていた。

（くっそお…俺としたことが！もっと気を張るべきだった）

「チツ、ここにもいねえかつ」

瑪瑙は屋根に跳び上がると、再び走り出す。

高い場所からだったら、もっと見つけ易いかも知れないからだ。

「裏路地か…なんか、やゝな雰囲気だなあ。早く引き返さな…きやつ！」

「つと！氣いつけるやボケっ」

「ごっ、ごめんなさいっ」

いたた、と腰をさすりながら、氷魚は涙目で相手を睨んだ。

角でぶつかったのは、茶髪の若者だった。

年の頃は、瑪瑙と大して変わらないように見える。

内心、氷魚は『お前こそ、氣をつけやがれ！』とひどく毒づいた。

「おいっ」

行こうとした氷魚の腕を、男は強く握る。

「なっ、なによ…ちよつとやだ、放してよ！放せっ」

腕を掴まれ、じたばたと暴れる氷魚に、男は下心丸出しの、いやらしい笑いを浮かべた。

「ここがどこだか、分かつてるンだろ？それとも…迷子か？」

「うるっさいわねっ、そんなの、アンタに関係ないじゃない、放さない蹴るわよ！？」

低く構えた氷魚に、男は一つ瞠目をしてから、パツと手を離す。

「おっと…氣イ強えなあ、氣の強い女は好きだぜ？大人しく、こっちこいよ」

勢いよく引き寄せられて、氷魚は慌てて顔を逸らした。

「いやだつてばっ！ちよつと、こら、やめろ！」

（ぎゃゝっ、息クサイっ！しかも…不つ細工なツラ近づけんなよっ）

氷魚は、必死に堪えていたが、ついに堪忍袋の緒が、ぶちり…と思いきり切れた。

「や…めろつて言っつてんだろが、この下種野郎

！」

氷魚の雄叫び（？）と、その後に、なにかを殴打する音が裏路地に響いた。

「いた！氷魚、なんで裏なんかにつ」

2、3軒屋根を飛び越えてから着地すると、瑪瑙は走りだす。

角を曲がって裏路地に入ると、血眼で探していた氷魚が、脱いだ靴を片手に佇んでいた。

「氷魚っ、氷魚」

「！」

「あ、瑪瑙！」

あまりの緊張感のなさに、瑪瑙は一瞬、がつくりと肩を落とす。

「あ、じゃねえ！さんざん探したんだぞっ、大丈夫か！？なにも、されなかったかっ？」

瑪瑙は、氷魚の双肩に手をあてがって、ガクガクと揺らした。

「見てのとおりよ、酔っぱらいに絡まれちゃってね…靴で殴ってやったから、ご心配なく」

氷魚が、つま先で示した先には、ぐったりと男が伸びている。

瑪瑙は、ギロリと伸びている酔っぱらいを睨んだ。

この酔っぱらいが…俺の氷魚に、あんな事や、そんなことを…（怒）

瑪瑙の中に、めらめらと嫉妬ともつかぬモノが燃え上がった。

「行くぞっ！こんなところ、長居したくもねえっ」

「うっ、うん！」

氷魚の手を掴んで、強く抱き寄せるようにしてから、瑪瑙は、歩調荒く裏路地を出て行った。

氷魚、迷子！？（後書き）

どうも、維月十夜です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けに参りました。

氷魚と瑪瑙、ジワジワと仲が深まってますね。（笑）

きつと次には…

ご期待くださいませね。

それでは、失礼致します。

落花流水 愛は、荒野に咲く (前書き)

ごく普通の高校生だった氷魚は、ある日、突然現れた瑪瑙に連れられて、異界の門を潜ってしまった！

旅を続けるうちに、互いに惹かれ合う氷魚と瑪瑙。

呂山の街での騒動をきっかけに、互いが必要であることに気づき、瑪瑙が氷魚にプロポーズ。

そしてついに…惹かれ合う2人は結ばれた。

## 落花流水 愛は、荒野に咲く

大通りへ向かつて歩きながら、瑪瑙はさりげなく、氷魚と手を繋いだ。

「あつ」

さつと一瞬、氷魚の顔が赤くなった。

ドクンドクンと、やけに心臓の音がうるさい。

氷魚は、ギョツときつく目をつぶってから、瑪瑙の方を振り向いた。  
「始めから、こうしとけばよかったな」

目元を和ませて、瑪瑙は笑う。

心底すまなそうに謝る瑪瑙に、氷魚は思いきり笑い返した。

「ヘンなの、あたしが勝手に迷子になったんだよ？　瑪瑙が謝ることないって、もうその話は終わりねー」

ぽかんと、一瞬惚けた瑪瑙は、ありがとうと笑って、氷魚の髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜたのだった。

彼女は強い。一人で痴漢に立ち向かったとはいえ、怖かっただろうに。

不本意のこととしても、彼女を一人きりにしてしまった自分が、ひどく恨めしい。

「ねえ瑪瑙、あれ見てよつ、なんか売ってる！」

氷魚が指さした先には、一軒の露店商らしき屋台があった。

黄昏の光を受けて、店先でキラキラと輝く宝石達は、見る者の目を楽しませる。

あまり、物に頓着しない自分でさえも、それらが美しいと思うのだ、氷魚がはしゃぐのも無理はないだろう。

「露店だな、工芸品や首飾りなんかを売ってるんだ」

「ああ、祭りの出店みたいなものね」

そわそわとする氷魚に、気づかれないよう、瑪瑙は忍び笑いをした。  
やはり若い娘なのだな、と。

「見ていくか？」

「えっ、いいの？嬉しいっ」

満面の笑顔を咲かせて、氷魚は繋いだ手を強く握りなおす。  
今度は、瑪瑙が赤面する方だった。

二人が露店に近づいていくと、途端に威勢のよい声が迎えた。

「いらっしやい！おや、兄妹揃って、仲がいいねえ」

迎えてくれたのは、大分年かさの女性だった。

「おばちゃん……俺たち、そんなに兄妹に見えるか？」

思いきり渋面を作って、むくれる瑪瑙。

恋人同士のもりでいたのに、兄妹と間違われるなんて非道すぎる。

「め、瑪瑙……そんなつもりで言っただんじやないってば」

機嫌を損ねた瑪瑙を、氷魚は慌ててなだめた。

「おつとと、そりゃ失礼だったね。恋人さんだったかい」

「え……そのっ」

氷魚が恥ずかしそうに身じろいだが、そんなことには構わずに、瑪瑙は続けた。

「ああ」

「そうか、なにをお探しい？うんと安くしてあげるよ」

片目を閉じてウインクし、気のいい女店主は快活に笑う。

「氷魚、なにか欲しいモンは……」

そう言いかけてすぐ横を振りむいた瑪瑙は、はしゃぎまくる氷魚とぶつかった。

「ねえねえっ、これ似合う？どお？」

ウルウルと、目を潤ませて聞いてくる氷魚に、瑪瑙はかなり面喰らった。

氷魚は、鮮やかな緑色の石その物がついた、耳<sup>ピアス</sup>環をつけてはしゃぐ。

「どれどれ、お嬢さん……ふむ、いいんじゃないか、髪<sup>髪</sup>の赤に映えてよく似合ってる」

「ホント？似合ってるってー……ねえ瑪瑙、嬉しいよお」

「よしよし、よかったな」

あれもこれも、と目移りしている氷魚を横目で見ながら、瑪瑙は女店主に小声で話しかけた。

「さっきのヤツ……頼めるか？」

「あいよ、まいどあり。見たところ、勝負時みたいだね……一番いいのを選んだから、頑張るんだよ？」

「おう、さんきゅ」

「ねーえ、瑪瑙っ！次行こうよ次いつ」

背中にどついてきた氷魚に、瑪瑙は慌てて、小さな包みを懷に隠した。

「なんだ、もういいのか？」

「うんっ、ねーえ次っ」

どうやら、気づかれていないようだ。

べつたりと懷いてくる氷魚に、瑪瑙は密かに、安堵の溜息をついたのだった。

「おばちゃん、俺たちそろそろ行くな？」

「まいどあり、頑張りなよー？」

快活に笑いながら見送る彼女に、瑪瑙はぺこりと頭を下げた。

「瑪瑙？」

氷魚は、なんの話だろうかと思ったが、そこは聞かないことにしておいた。

辺りはすっかり暮れなずみ、月が仄青く、辺りを照らす。

二人は衙を離れて、月がほんのりと照らす広野を歩いていた。

「氷魚、疲れてないか？」

瑪瑙は立ち止まって、氷魚に振りむいた。

「平気だよ？あたしは大丈夫」

もくもくと歩き続ける彼女に、瑪瑙の眉間に、溪谷なみに深い皺が刻まれる。

「嘘つけ、お前はいつも我慢するんだ……ほら、座つてろ」



「平気だつてば、ンやつ」

少し強引に氷魚を座らせてから、瑪瑙は、深くい溜息をついた。

「あんまり我慢するなよ、な？氷魚」

ポフポフと、頭を撫でて瑪瑙は笑う。ほんの少しだけ、悲しそうに。

「……ごめん」

「なんてな、いいんだよ別に……謝るな」

しゅんと頂垂れた氷魚に、瑪瑙はにべもなく言った。

「え？」

ぱちくりと瞠目した氷魚に、瑪瑙はにつこりと笑った。

「手えだしな、いいモンやるよ」

座り込んでいる、氷魚の手を引いて立たせてやってから、瑪瑙はがさごそと懐を探る。

「なあに？ヘンな事じゃないでしょーね、あんたなら、それもあり得るから」

ぷん、とふんぞり返る氷魚に、瑪瑙はがつくりと肩を落とした。

「ちーがうつて、ったくよお……ちつとは信用しろよな？」

「冗談よ、冗談……なあに？」

「あつたあつた……指環<sup>ゆびわ</sup>じゃねえのが残念だが、これ、受け取ってくれねえか？」

瑪瑙は、懷から小さな包みを取り出すと、そつと氷魚に差しだした。

「なあに、あたしに？開けても……いい？」

「ああ、見てくれ……きつとお前も気に入るよ」

「瑪瑙から、プレゼントなんて珍しいねー……なにかしら？」

包みを開いて出てきたのは、さっきの露店で氷魚が見ていたのと同じ、一対の翡翠の耳礫だった。

「瑪瑙、これっ」

氷魚はあまりの嬉しさに、目を輝かせた。

「済まないな、氷魚。ホントは指環と思ったんだが……俺の有り金じゃ、こんくらいしか買ってやれなかった」

すまなそうに言って、ポリポリと頭を掻く瑪瑙。

そんな彼に、氷魚は思いつきり頭を振った。

「そつ、そんなことないよ！あたし、嬉しい」

声が、どんどん尻すばみになっていく。

すでに、氷魚の顔は真っ赤だ。

照れて、はにかむ氷魚を、瑪瑙は強く抱き寄せた。

「く、苦しいよお……瑪瑙？」

「人間も同じだったよな？」

一瞬、なんのことだろうと瞠目してから、氷魚はさらに赤くなった。

瑪瑙が、なにを言いたいのか分かったからだ。

「これ、もしかして……プロポーズなの？」

「なあ氷魚、そばに……いて欲しいんだ。ダメか？」

真剣な、紫陽花色の瞳に見つめられて、氷魚は固まってしまう。

「そつ、そんな……ダメじゃ、ないよ」

「不幸な思いはさせねえ、だからっ……」

「……瑪瑙、あたしは……」

答えを待つ瑪瑙に、氷魚は柔らかく微笑みながら言った。

「ありがと、あたしでよければ、瑪瑙のお嫁さんにして……」

その先を、氷魚は言うことができなかった。

狂喜した瑪瑙が、唇を奪ったからである。

その夜、満天の星空の下で、二人は二度と離れずに結ばれた。

「泣くな……なんで、泣く？」

氷魚の瞼にキスして、そつと涙を拭ってやる。

「だって……幸せ、なのよ、すごく」

「氷魚……愛してるっ」

「やあ……んっ、あっ」

まどろみながら幸せをかみしめ、氷魚は目を閉じた。

落花流水 愛は、荒野に咲く (後書き)

どうもこんばんわ、ご無沙汰しておりました維月です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けに参りました。

物語は、少し濡れ場が多すぎたかなあ？うゝん(笑)

二人は、これで幸せにはさせませんよ、一筋縄ではいきません(苦笑)

ここまで読んでくださる読者様方には感謝です。

これからも、よろしければ謁見の程を。

それでは、失礼致します。

## 幻夢（前書き）

早瀬氷魚は、どこにでもいるごく普通の高校生。

ある日、氷魚は『迎えにきた』といって目の前に現れた青年・瑪瑙に連れられて、異界の門を潜ってしまう。

砂漠を越え、ハプニング、アクションを交えた旅を続けるうちに、急速に惹かれ合い始める二人。

そして、ついに二人は結ばれ…故郷への旅は一時、終わりを告げる。

## 幻夢

さらさら、さらさらと。

水は流れる。

細く頼りない流れは、一つに集まり、やがて夜目にも青白く輝く泉となった。

静かな波の中に、氷魚は漂っていた。

【氷魚……おいで、おいで。目を開けてごらん？】

穏やかな青年の声が、そつと氷魚を誘う。

「誰？ あなた、誰……どうして、あたしを呼ぶの？」

氷魚は無意識に、その声に安らぎにも似た、懐かしさを思い出していた。

「霧で、なにも見えないの……あなたは、どこに？」

【おいで、こつちだ】

手が、差しだされる。掴んだその手は、まるで少女のように白く、細かった。

（白い手……女の、人？）

手を取ると同時に、立ちこめていた霧が溶けるように晴れていった。霧が晴れて、相手の顔が分かった瞬間、氷魚は余りの驚きにきつく息を詰めた。

「あなたっ！ あっ、あたし?! ううん、男の人よね? でもそっくり」

うるたえる氷魚に、彼は柔らかく微笑さくらんでから、そつと手を離す。

【やっと会えたね……氷魚、俺は柘榴さくら、君の兄だ。どうしても、伝えたいことがある】

「伝えたい、こと？」

氷魚の兄・柘榴は、ふいに端正な顔を、悲しみに歪ませた。

【君を……守ってやれなかった、許してくれ】

「え……なんの、こと？」

【そうか、いや……知らないなら、今はまだそのままでもいい。でき  
たなら、命あるうちにお前に会いたかったよ】

そっと、頭を撫でる手がひどく愛おしくて、氷魚は奥歯を噛みしめ  
て、こみ上げる涙を必死で堪えた。

(……兄さん……)

【村を、頼む……瑠璃と　　に】

「なに？　なんて言ってるのか分かんない！　ねえ兄さんっ」

まるで、一時だけ引いていた潮が満ちるように、再び深い霧が立ち  
こめ、すぐになにも見えず、聞こえなくなった。

「兄さん！　兄さん　　！？」

「氷魚！？お前……何やってんだよっ」

氷魚は、素っ頓狂な瑠璃の声に、ふと我に返った。

現実でも、氷魚は浅い湖、といっても腰くらいまでしかないのだが  
の中ほどに浮いていた。

それも、一糸纏わぬ姿で。

確か自分は、ここに水浴びに来たはずではなかったか？

ぼんやりと空を見あげていると、突然彼女の意識は浮上した。

バシャバシャと、水を漕いで瑠璃が近づいてくる。

その時、氷魚は改めて自分が一糸纏わぬ姿であるのに気がついた。  
が、時すでに遅し、である。

「きゃあ　　！　バカツ、変態えっち　　！こっちこないで

」！

「んごっ！？」

その後すぐに、ぱ　　んっと、威勢のいい音が大気を揺るがせた。

慌てて、物陰でこそごと服を着け始める氷魚。

瑠璃は、鼻血を噴いてダウン中。

そのわけは無論、殴られたからだ。

「つてえ……なに今更恥じらってただよ？　いいからこっちこい」

むくりと起きあがった瑪瑙は、軽々と氷魚を掬い上げると、そっと抱き締めた。

「どうした……どっか具合悪かったのか？　どうかしちまったかと思っただぜ」

「……」

瑪瑙の腕の中で、なめらかな赤毛を撫でつけられながら、氷魚は大人しくしている。

「……声がしたの、ずっと、あたしを呼んでた」

「声？」

瑪瑙は、ん？と片眉を上げた。

「赤い髪の男の人が、あたしを呼ぶの……すごく懐かしくて、でも、彼の名前が、思い出せなくて」

その時、さっと瑪瑙の顔色が変わった。

「柘榴……柘榴だ！氷魚、他になにか言っただったか？」

「ただずっと、謝ってた。『守れなくて、すまなかった、村を頼む』って」

「そうか、アイツらしい……死んでもお人好しだよ、感謝してやんなきゃだな。アイツが、俺たちを引き合わせたんだ」

「……ええ……」

氷魚は、そんな兄を、心底誇らしく思った。

彼がいなければ、瑪瑙とは会うことができなかっただろう。

「おつ、そろそろ見えてきたな……あの丘を2つ越えたら、俺たちの村だ」

「……ついに、着くのね？」

氷魚は、感慨深く言った。

もうすぐ着くのだ、氷魚の故郷に。

人間としてではなく、彼女が本来、生きべき世界に。

「ああ」

瑪瑙は一際強く、氷魚の肩を抱き締めたのだった。





## 幻夢（後書き）

どうも、維月です。

『幻夢抄録 覚醒め』のお届けです。

うゝん、どうだろう、この話は：余り面白くないだろうか？  
少し心配。

しかし、ここまで読んでくださっている読者様方には感謝感激です。  
こんなでも宜しければ、読んでみてやってください。  
それでは、失礼致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1188a/>

---

幻夢抄録 覚醒め

2010年10月10日03時43分発行